

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	山本 麻起子
論文題目	外来の技術はどのように受容されるのか ーザンビア北部州における小規模灌漑技術プロジェクトを事例にー		
(論文内容の要旨)			
<p>ザンビア北部で2009年から2011年にかけてJICAプロジェクトによる「小規模農民のための灌漑システム開発計画調査」(略称COBSI)が実施された。本論文はCOBSIの実施から約5年が経過した農村においてCOBSIの小規模灌漑の技術が当地の技術として内在化しているのか、もしくは内在化しなかったのかを農業実態を調査することで明らかにしている。そのうえで、外来の技術が当地の内発的な発展にどのように繋がるのかを論じている。</p> <p>第1章では、本研究と関連のある先行研究の議論を整理し、国際開発の潮流において、海外ドナーの主導による外発的な発展の限界が指摘され、途上国の内発的な発展性が注目されてきた経緯を跡付け、以下の2点を指摘している。開発援助において、住民が主体となり計画や実施に参加することが開発課題の解決につながるという住民参加型アプローチが主流となったが、それによって、必ずしも課題が解決されるわけではなかった。むしろ知識や技術を持った身近な外部者(農業普及員や移住者)が課題解決に貢献することが示され、アフリカ地域研究の事例では当地の農家が外来の技術に関心を持ち、模倣を繰り返して工夫を重ね、在来の技術として内在化することが見出されている。</p> <p>第2章では、対象地域の概要について述べ、対象地域の人びとの営農に大きな影響を与えてきたザンビアの農業政策の変遷について示したうえで、調査対象とした3村が位置するザンビア北部の自然環境やそこに暮らす人びとの農耕について説明している。チテメネと呼ばれる焼畑農法が当地のベンバの人びとにとってアイデンティティの源泉となっている一方で、チテメネに加えてハイブリッド種を中心としたトウモロコシ栽培が取り入れられ、化学肥料の価格高騰がトウモロコシ栽培の継続を難しくしている現状を紹介している。</p> <p>第3章では、COBSIの技術移転の流れを示したうえで、COBSIの技術を農家がどのように受け入れ、活用しているかが示されている。COBSIは当地の環境に適した灌漑の技術を、各地に所在する農業省職員と農業普及員の普及活動を通じて短期間で広範囲の農家に伝えた。こうした普及活動によってCOBSIの活動を知った農家は農業普及員に依頼してCOBSIの技術支援を受け、移転された技術は農家によって様々な工夫が加えられ当地の技術として活用されるようになった。</p> <p>第4章は、C村(63世帯)を事例とし、従来のチテメネ耕作やファーム耕作では</p>			

主食食材を自給生産できていない世帯が住民の7割以上を占めていた一方で、全63世帯における8割の世帯が灌漑農業に従事するようになっていたことを示している。C村では従来チテメネの準備をしていた乾季に灌漑農地で野菜を栽培し、この野菜の販売から得られる現金収入を化学肥料の購入や子どもの授業料への支払いに充当しており、農家にとって灌漑農業は不可欠となっていた。

第5章では、L村（92世帯）を事例に、村長の強いリーダーシップのもと、COBSIの支援を受けて簡易堰を建設し、その後に恒久堰に建て替えをした経緯を記述している。C村と比較して、多くの農家が灌漑農業に従事する動きはなく、COBSIで建設した水路を利用する世帯は全世帯の18%に止まった理由を、灌漑農業を新たに取り入れずとも、広い農地や豊かなミオンボ林、複数の水源を利用した多様な生計手段が可能であった点に求めている。

第6章は、従来から灌漑農業に取り組んできたK村（46世帯）を事例に、既存の水路に加えてさらなる水源確保を必要としてCOBSIに支援を依頼した経緯を記述している。結果的に、K村では既存の水利グループの知見を活かせず、村内のリーダーシップが作用しなかったため、水路を引くうえで農家間の調整ができず、技術者が指導を終えて現場を離れた後に農家は水路建設を中断してしまった。

第7章では、3か村における小規模灌漑農業の影響について各村の特徴を比較しながら整理している。灌漑農業を開始してからの生産や消費の変化、灌漑農業を中心とした生計戦略など人びとの行動の変化を明らかにしている。

第8章では、COBSIの小規模灌漑農業の技術がどのように受容され内在化していったのかを考察し、以下の2点を指摘している。まず、外来の技術が当地に内在化するには、当地の人びとにとって導入しやすだけでなく、この技術に農家が工夫を加えていくプロセスが必要であった。また、K村ではCOBSIの技術が定着しなかったことから、当地の水利グループの知見が活かされることが重要であり、技術者が現場を離れた後にもプロジェクト側が経過観察や指導を継続する必要性があった。

第9章では、前章での考察を受けて、外部からの技術支援がアフリカ農村の内発的発展につながるためには、プロジェクト実施側の効果的な技術移転に加えて、農家側が技術を内在化するプロセスが重要となると結論している。また、こうした内在化のプロセスを経て、農民の自主的な活動が促進され、灌漑農業から創出される現金収入が従来の営農や新たな試行に欠かせないものとなり、当地の内発的な発展につながっていたことを指摘している。